



1月

学校だより

令和2年1月7日
横浜市立八景小学校
〒236-0021
横浜市金沢区泥亀1-21-2
TEL 045-781-2434
校長

「平和」を想う

学校長

令和2年、新たな年が始まりました。今年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピック2020が開催され、八景小学校が創立70周年を迎える節目の年でもあります。新たな気持ちで今年も心をひとつにして進んでまいります。どうぞよろしく願いいたします。

さて、令和元年11月にローマ教皇が日本を訪問し、戦争中に原爆が投下された長崎と広島を訪れました。平和の祈りを捧げるとともに、「核兵器のない世界を実現することは可能であり、必要不可欠だと確信している。」とメッセージを述べました。そして、原爆投下後に撮影されたひとりの少年、「焼き場に立つ少年」の写真をカードに印刷し「このような写真は千の言葉よりも多くを語る」として、訪問先などで配ってきたそうです。

長崎といえば、以前長崎を訪れた際に深く感銘を受けた場所があり、次に長崎に行くことができたらずひもう一度行きたいと思っていた場所があります。それが「長崎市永井隆記念館」と「如己堂」です。永井隆博士は放射線医学の研究者であり、放射線を過量に受けて白血病にかかり余命3年との宣告を受けたすぐ後に、長崎に原爆が投下され被爆しました。爆心地近くの長崎医科大学にいた博士は、猛烈な爆風に吹き飛ばされ重傷を負いましたが、何度も倒れながらも起き上がり、負傷した人々の救護活動に当たりました。後に、この時の様子と放射線医学の研究者の視点で「長崎の鐘」を著しています。また、爆心地から700mのところにあった山里小学校の被災児童の手記「原子雲の下に生きて」をまとめて、子どもたちと共に亡くなった友達の慰霊碑「あの子らの碑」を建てたり、原子野を「花咲く丘」にしようと桜の苗木三千本を植えたりと、長崎の復興のために力を尽くされました。ご自身は原爆投下3日後に自宅に戻り、妻を亡くしたことを知ります。ご自身も余命数年と言われており、二人の幼子を残して自分もこの世を去らねばならないのかと胸を痛めながら、寝たきりになってもなお本を書き、友人たちが建ててくれた二畳一間の「如己堂」で、作家として父として子どもと語りながら生涯を閉じました。43歳でした。「如己堂」には己の如く人を愛すという意味が込められています。私は今夏長崎を訪れる機会があり、数年ぶりに記念館と如己堂を再訪しました。改めて博士の偉業と平和の尊さに心が揺さぶられました。

私は永井博士より年齢では上ですが、人として生きている時間・濃密さ・中身はどうだろうか考えると恥ずかしい気持ちになります。平和の祭典オリンピック・パラリンピックが日本で開催される今年、平和の大切さを伝えていかねばとの想いを新たにしています。